様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 30 日現在

機関番号：24403
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520750
研究課題名（和文）資本主義精神の由来に関する学際的研究―カルヴァン派とユダヤ人―

研究課題名（英文）Interdisciplinary Studies on the Origin of Capitalistic Spirit ― Calvinists and Jews ―

研究代表者　佐々木　博光（SASAKI HIROMITSU）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：80222008

研究成果の概要（和文）：

マックス・ウェーバーは職業労働に臨む態度を「伝統主義」、「幸福主義」、「資本主義の精神」という三つのカテゴリーに識別した。この分類を使うと、ヨーロッパの主流は「幸福主義」ではないかと考えられる。それを支えたのは贈与の精神である。しかしウェーバーの考察には贈与行為の占める場所がない。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に代わる『プロテスタンティズムの倫理と贈与の精神』を構想するという課題を発見した。

研究成果の概要（英文）：

Max Weber classified attitudes toward vocations into three types ― „traditionalism“, „eudemonics“ and „spirit of capitalism“ ― in his *Protestant Ethics and Spirit of Capitalism*. Of three types eudemonic lifestyle seems to play a central role in Europe. It was supported by spirit of gift. There was nevertheless no room for gift in Weber's studies. I have raised a new question, to write *Protestant Ethics and Spirit of Gift* instead of Weber's *Protestant Ethics and Spirit of Capitalism*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：資本主義精神、予定説、贈与、贈与の精神、財団、救貧、執事

１．研究開始当初の背景

資本主義の行末がいまほど案じられた時代はない。資本主義の行末を案じた先人としてまず思い出されるのがマックス・ウェーバーである。彼の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に対して、近年羽入辰郎氏がウェーバーの史料の扱いが極めて杜撰であったことを文献学的に批判し、そこに作為的な「操作」の跡が感じられると主張した。われわれの資本主義理解を決定的に左右した書物が、作為的な史料操作の上に成り立っていたのだとすれば、ウェーバーが単に史料ばかりでなく、資本主義の行末をも操作しようとしたのではないかという疑惑が頭をもたげる。この疑惑を追及し、資本主義の善導に資するのが本研究の目的である。

２．研究の目的

資本主義に関する研究は多士済々、枚挙に暇がないが、それをもたらした理念、すなわち資本主義精神の由来に関する研究といえば、やはりまず思い出されるのはマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。そこでウェーバーが案じた資本主義の行末（末人の支配、モラルの崩壊）と、われわれが日々直面する資本主義の問題は見事に符合する。ウェーバーの先見性を賞賛したいところだが、ウェーバーがこのような状況の出来に一役買った可能性も否定できない。それはすくなくとも一度は検討されてしかるべき課題である。それほどわれわれにとって「ウェーバーの呪縛」（羽入）は大きかった。資本主義の問題性が誰の目にも明らかになった現在、ウェーバーが単に史料ばかりでなく、資本主義の行末をも操作しようとしたのではないかという疑念が、検討されてしかるべきである。

ウェーバーはカルヴァン派信者を資本主義精神のパイオニア、カルヴァン派の予定説をその駆動力とみなした。しかしウェーバーの議論の組み立てに解せない部分のあることが久しく指摘されてきた（例えば越智武臣氏の批判）。プロテスタントと資本主義的な経営、労働の親密性を例示するために、ウェーバーは議論の冒頭で、「たとえば、1895 年のバーデンでは、プロテスタント 1000 人につき資本収益税の課税対象となる資本額は、95 万 4060 マルク。カトリック教徒 1000 人につき資本収益税の課税対象となる資本額は、58 万 9000 マルク。ユダヤ人は 1000 人につき 400 万マルクであって、言うまでもなく断然先頭に立っている」という。この例から素直に課題を導き出すとすれば、ユダヤ人と資本主義的な経営、労働が親密性を示すのはなぜか、キリスト教徒のなかではプロテスタントのほうが、どちらかといえばそれに近い数値を示すのはなぜか、問いは本来このように立てられてしかるべきである。

ユダヤ人とプロテスタント、なかでもカルヴァン派の比較検討が必要になる。そのさい 16、17 世紀の宗教紛争のさなか、ユダヤ人とカルヴァン派の類似を告発する文書が、とくにルター派の作者によって多数作成されているのが注目に値する。資本主義精神の起源という観点から、近世のユダヤ人とカルヴァン派の比較史的考察の必要を提唱したのは、元マックス・プランク歴史学研究所所長のハルトムート・レーマンである。レーマンはその後この方向に自身の研究を発展させたわけではなく、レーマンの指摘を引き継ぐ研究もまだ現れていない。しかしウェーバー研究の第一人者であるレーマンの指摘は重い。ウェーバーはユダヤ教に関する一書も物している。しかし彼はユダヤ教を政治あるいは投機を志向する「冒険商人」的資本主義の側に立つものとし、そのエートスは賤民（パーリア）的資本主義のそれだったいう。これに対してピューリタニズムの担うエートスを合理的・市民的な経営と労働の合理的組織のそれと評し、両者の間に一線を画す。1990 年代以降ドイツ、オーストリア、スイスでは、自治体がかつてのユダヤ人の地元への貢献を顕彰するためにユダヤ博物館を建立した。これらの博物館を回ってわかるのは、ユダヤ人資本家が地域産業の興隆に果たした役割の大きさである。この点で彼らが担ったエートスは、ウェーバー言うところのピューリタニズムのそれに限りなく近いものだった。

ウェーバーの資本主義精神に関する研究で、筆者が特に腑に落ちない点がもうひとつある。自分が救われるべく予定されているのかどうかがわからないという不安が、カルヴァン派の信者を激しい労働に駆り立てた。そしてこれは一般信者ほど強かったという。カルヴァン派が絶対多数を占める国ではそのようなことも起こるかもしれない。しかしそのような状況は、スコットランドや一時のオランダを除き出現することがなかった。スコットランドもイギリス国教会が支配するイングランドとの関係を考慮するならば、カルヴァン派はやはり少数派の地位に留まったと見るべきかもしれない。カルヴァン派は他宗派との競合のなかで生きることを宿命づけられた。そこから生まれたのは、自分たちは救われるべく予定されたという選民思想であった。この点は当時の人びとにカルヴァン派とユダヤ人の共通点として強く意識されたことである。救われるかどうかという不安ではなく、救われるために選ばれていると

いう自負、そこから生まれる安心が職業労働の起動力になった可能性が高い。安心を育むための信仰共同体内の相互扶助組織のあり方が比較検討されるべきである。ウェーバーが考察しなかった寄付等の贈与行為の重要性が明らかになる。それはその他の宗派社会にも模倣された。京都大学の金澤周作氏は、その近著においてイギリス近代を特徴づけた要素として慈善（チャリティ）の重要性を説く。筆者の見立てでは、それはイギリス以外のヨーロッパ諸国にも該当する。ウェーバーが発信した不安を起動力とする資本主義ではなく、慈善に支えられる安心がヨーロッパ的生活の原点にあることを明らかにする。

カルヴァン派とユダヤ人の資本家には、地域産業の興隆に挺身すると同時に、慈善活動にも精を出す地域の篤志家タイプの人たちが多かった。ウェーバーの議論をベースにした資本主義論にはどこか殺伐としたイメージがつきまとう。資本主義というものの本質が殺伐としたイメージと切っても切れない関係にあるような錯覚すら生まれている。しかし本家のヨーロッパでは資本主義の亢進によるモラルの低下を食い止める努力が古くからなされてきた。それが金澤氏のいう慈善（チャリティ）である。ウェーバーの資本主義論によって伝えられることのなかった以上の側面を掘り起こすことによって、資本主義の諸問題が日常化し、モラルの顛倒が常態化した観のあるわが国の社会・経済生活に一石を投じることが本研究の目的である。

３．研究の方法

カルヴァン派とユダヤ人がヨーロッパにおいて資本主義精神の担い手となりえた理由を、彼らの宗派的・宗教的な特徴から説明するのが研究の目的である。それぞれの宗派・宗教に対する他派の評価と自己認識から、この特徴を浮かび上がらせる手法をとる。ルター派の神学者はカルヴァン派を弾劾するために、彼らとユダヤ教の共通点を攻撃目標にしたが、それはどんな点だったのか。カルヴァン派神学者のユダヤ人、ユダヤ教観とはどんなものだったのか。逆にユダヤ教ラビのカルヴァン派観はどんなものだったのか。これらの問題はわが国のみならずヨーロッパにおいても依然として未開拓の事柄である。本研究の準備段階で関連史料の所在調査を行った。それらはすべて現地でのみ閲覧が可能である。ルター派が強い北ドイツ、異宗派、異宗教の混在地帯の観を呈するスイス、オランダに関する史料調査が不可欠になる。

ウェーバーが資本主義精神の最大の特徴と考えるのは、事業のために人がいるのであって、人のために事業があるのではないという一種転倒した価値観である。このような特徴がよく現れているのはヨーロッパではなく、むしろわが国である。ヨーロッパを資本主義精神の毒牙から救ったのは、民間の支援システムであったように思われる。そこではわが国と異なり財団の果たす役割が大きい。貧民の救済から学術支援、海外援助に至るまで、およそ日本ならば政府や政府系機関が担うであろう事業への民間の参入が活発である。すでにふれた金澤周作氏が近著でイギリスについて明らかにした慈善（チャリティ）の重要性は、その他のヨーロッパ諸国にも該当する。民間の支援システムがヨーロッパで発展した理由は、彼らの独特の名誉観にあった。支援する側は尊い事業に参加することによって名誉を得る。支援される側も自分が支援に値する人間だという自負を得る。簡単に言うならば、ヨーロッパでは富は最終目標ではなく、名誉を買うための手段にすぎない。逆にわが国では富が自己目的と化している。これこそウェーバーが資本主義精神の行きつく先として予見したものである。このような決して合理的とはいえない制度を、ウェーバーがなぜ考察しなかったのかはわからない。いずれにしてもわが国では民間の支援システムが大変弱く、それにかかわることは人びとの名誉欲を必ずしもくすぶらない。スイスやオランダのカルヴァン派とユダヤ人の自己認識を調査するさい、彼らの名誉観、それとそれぞれの宗派・宗教との関係が考察の中心になる。カルヴァン派とユダヤ人が、ウェーバーの説くのとは異なる資本主義精神のパイオニアになったことを明らかにし、その要因を探るのが本研究のねらいである。

４．研究成果

マックス・ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、職業労働に臨む態度を「伝統主義」、「幸福主義」、「資本主義の精神」という三つのカテゴリーで識別する。「伝統主義」とは必要をもって足れりとする態度で、簡素な生活を心がけ、伝統的な必要を充たす以上の労働を忌避する姿勢である。これに対して「幸福主義」とは、個人や家族が豊かな消費生活という幸福や利益をすこしでも多く享受できるように働く、そのような態度を指す。「伝統主義」とは対照的で、「幸福主義」の観点からも非合理に見えるのが、最後の「資本主義の精神」である。それは自分の職業の繁栄を最上の目的とし、個人や家族の幸福を犠牲にしても職業労働に献身する態度である。ウェーバーは、最後の態度は予定説によって救いの確証を奪われたカルヴァン派の信者だけが達することのできた境地であると考えた。しかしいったん資本主義の精神が生まれ、資本主義の機構が稼動すると、もはやそれは宗教的なエ

ートスを必要とはしない。適者生存の論理が働き、資本かも労働者もこのシステムに順応できる人材だけが自動的に選別されるようになる。

わたしは現在のヨーロッパの職業労働に対する姿勢の主流を占めるのは、ウェーバーの分類を使うと「幸福主義」ではないかと考える。つまり「資本主義の精神」による淘汰はウェーバーの考えるようには進まなかった。そしてさまざまな徴候が示唆するところでは、すでにウェーバーが生きた時代には幸福主義的な職業態度がかなり一般化していた。問題は学界内で権威をもつ学説は何かといった域を超えている。わが国は西洋を模範として近代化を急いできた。そのさい資本主義の興隆が最重要課題と意識され、わが国の西洋学者の研究課題をも大いに左右した。このためヨーロッパのライフスタイルが幸福主義的であるか、それとも資本主義の精神の上に築かれているかは、われわれにとって単なる学説史上の意味以上のものをもつ。そこのボタンを掛け違えているのだとすれば、ウェーバー・テーゼは確実に葬り去られなければならない。

カルヴァン派の予定説に資本主義精神胚胎の原動力を見るウェーバー・テーゼは、主としてふたつの方向から批判を受けた。ひとつは中世後期の北イタリアにすでに資本主義的な経営だけでなく、資本主義の精神も存在したというカトリック側からの批判である。いまひとつはイングランドのピューリタンの日記の分析から提出されている。そこでは二重予定説の占める比重は殊のほか小さく、一般信者の信仰生活にとって摂理信仰が大きな意義をもっていたことが明らかにされている。二重予定説の醸し出す不安ではなく、神の摂理の存在を証す事業に参加しているという喜びが、信者の原動力になっていたのである。このように資本主義精神の由来に関するウェーバー・テーゼには、すでに手痛い批判が複数の方面から寄せられている。

しかしウェーバー・テーゼは、権威のある学説にありがちな惰性によってここまで延命してきた。資本主義精神の由来に関するウェーバーの説明が、彼が自身の学問論で展開する因果帰属のための歴史的考察を実践したものである。因果帰属の歴史研究の妙味は学説の蓋然性と意外性の混合にある。この説の魅力は、資本主義の発生という純経済学的な問題の原因を予定説という純神学上の立場にさかのぼる、その学際的な因果帰属の方向の意外性にある。学説の蓋然性は幾多の批判を浴びて消耗したが、そのたびにその意外性が学説の防衛に成功した。羽入辰郎氏の批判は学説の意外性のみをターゲットにした稀有の試みであった。それは一瞬精彩を放ったが、ウェーバー・テーゼを葬るにはいたらなかった。この経験が教えているのは、学説の蓋然性と意外性を同時に批判する戦略が必要であるということである。惰性で生きる権威的な学説を克服するには何をすればよいのか、ウェーバー・テーゼの埋葬は学問史の宿願である。

わたしはウェーバーが捨象した経済史上の課題を取り込むことで、それができるのではないかと考えている。ウェーバーの西洋近代の考察には贈与行為の占める場所がない。西洋では資本主義の精神と対立する贈与の精神が社会生活に占める比重は伝統的に高い。資本主義の精神と贈与の精神は相補的な関係に立つものかもしれない。しかし両方の精神が異なる合理性に基づくことは間違いない。ヨーロッパの職業労働に対する姿勢が幸福主義的であるのも、贈与の精神が資本主義の精神に対する抑制剤として働いているからかもしれない。

贈与の精神においてもカルヴァン派とユダヤ人の果たした役割は大きい。改革派系やユダヤ系は財団の活動にも熱心であった。両者が多数派のなかにマイノリティとして共存するケースが多かったことが一因である。もともと贈与の精神は宗派の同胞に向けて発揮された。しかし宗派の垣根を超えて活動範囲を広げる財団も少なくなかった。

カルヴァン派と贈与の精神という問題について、ウェーバーが資本主義精神の権化と感じ、それを例示するために最大限利用したベンジャミン・フランクリンから興味深い事例を拾うことができる。フランクリンについてはハインツ・シュタイナートが近年、ウェーバーはフランクリンのテクストを完全に誤解したと主張した。彼によればフランクリンは金を得るために時間を利用しなければならないという文章を、あきらかに皮肉をこめた調子で書いていた。しかしウェーバーはこの皮肉に理解が及ばず、それをフランクリンの真意と受け取ったという。これが本当だとすると、資本主義精神はその定義から見直しを迫られることになる。贈与の精神との関連で、フランクリンが州内に大学を設置するために金策に奔走していたことを挙げておきたい。

神学者のフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフによれば、ウェーバーの『プロ倫』に最も大きな影響を与えたのは、ベルンの神学者マティアス・シュネッケンブルガー（1804－1848）の『ルター派と改革派の教義の比較考察』（1855 年公刊）であった。わたしはベルンの国立公文書館でシュネッケンブルガーの遺稿類と取り組む機会を得た。彼はヴュルテンベルクのルター派信者で、改革派のベルン大学に招聘され、そこで 1834 年から亡くなる 1848 年まで神学教授として活動した。彼はとりわけスイスの改革派プロテスタン

ティズムとドイツのルター派の教義上の相違に執心した。シュネッケンブルガーはそれを予定説に見る。この点はウェーバーと変わらない。それは必然的に永遠の絶望をもたらしかねない。しかしその不安が善き行為への起爆剤になるわけではない。シュネッケンブルガーによると、神がひとつの統一体であるとすれば、捨てられしものと救われしものの二元論が永遠に続くことはありえない。劫罰と至福は対蹠的なものではありえない。有機的な全生活が全人を包まなければならず、そこでは劫罰の位階は至福の下位段階をなす。シュネッケンブルガー曰く、これが改革派の宗教教義の汎神論的な基調である。ウェーバーはシュネッケンブルガーの分析をかなり我流に解釈しなおしていた。

ウェーバーは予定説が個々人に及ぼす影響から出発するが、シュネッケンブルガーが改革派の教義の前提に据えるのは個人ではなく共同体である。シュネッケンブルガーの強調するところでは、ルター派の教会は神学者の教会であるが、改革派のそれは信者共同体の教会である。改革派の教義もまた共同体の宗教意識の発現であるが、これに対してルター派のそれは神学者の体系である。ウェーバーは、改革派の予定説の意味に関するシュネッケンブルガーの説明をかなり奔放に加工した。

シュネッケンブルガーは 1855 年刊の著書で、共同体宗教改革の論点をそれ以上発展させることはなかった。同僚のフリードリヒ・エルンスト・ゲルプケが 1848 年にシュネッケンブルガーにささげた追悼記念講演からは、シュネッケンブルガーが教会の教義や教義史ばかりでなく、教会の地政学や政治算術にも関心をもっていたことがうかがえる。ベルン国立公文書館が所蔵するシュネッケンブルガーの大部の遺稿類のなかに、『オランダ、ベルギーの改革派教会の政治算術と地政学』と題する一冊がある。この冊子が注目に値するのは、シュネッケンブルガーが 1855 年刊の問題の遺稿のなかで改革派の予定説を記述するさい、彼はアルミニウス論争にいたるオランダの状況を確実に念頭に置いていたからだ。そこでシュネッケンブルガーは当時のオランダの政治的激変を概観する。しかし彼の関心は政治史にあるのではない。「この国制を下から上に追跡すれば、存続したのは以前同様共同体である。」そのさい彼は改革派の重要な制度として、牧師を議長とする長老たちの教区会議とならんで執事と連携する救貧を挙げている。これが改革派の最も重要な共同体活動であり、それは贈与の精神と深い関係をもつ活動であった。

ウェーバーが資本主義精神を構成するさいに利用したベンジャミン・フランクリン、マティアス・シュネッケンブルガーの周辺調査から、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に代わる『プロテスタンティズムの倫理と贈与の精神』を構想する必要を痛感した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①佐々木博光、論説、査読無、「近代ドイツの歴史教科書にみる中世のユダヤ人迫害」『人文学論集』30 巻、2011 年、37 - 77 頁。
②佐々木博光、論説、査読無、「ペスト観の脱魔術化―近世ヨーロッパの神学的ペスト文書―」『人間科学:大阪府立大学紀要』7 巻、2011 年、59 - 91 頁。
③佐々木博光、史料翻訳・解題、査読無、「ペスト対話に見える近世ヨーロッパ」『人文学論集』29 巻、2010 年、17 - 37 頁。

〔学会発表〕（計 4 件）

①佐々木博光、田中きく代他編『境界域からみる西洋中世―文化的ボーダーランドとマージナリティー』の合評会のコメンテーター、西洋史読書会例会（招待講演）、2012 年 7 月 7 日、京都大学。
②佐々木博光、小シンポジウム「近世ヨーロッパの宗教と政治―宗派分裂の作用と反作用―」のコメンテーター、第 62 回日本西洋史学会（招待講演）、2012 年 5 月 20 日、明治大学。
③Hiromitsu SASAKI, Wo ist der Geist des Kapitalismus? Zur Entzauberung der Max Weber's These, 2012. 3. 15, Historisches Institut（招待講演）, Universität Bern.
④Hiromitsu SASAKI, Wo ist der Geist des Kapitalismus? Zur Entzauberung der Max Weber's These, 2012. 3. 15, Institut für Medizin（招待講演）, Universität Bern.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

６．研究組織
(1)研究代表者　佐々木博光
(SASAKI HIROMITSU)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：80222008